「北東アジア地域と我が国の観光交流、インバウンド振興策」

大阪観光大学名誉教授
鈴木勝

「北東アジア観光圏」の現況を探り、将来の活性化策を考える。同時に、日本の国際観光の急伸を見、この観光圏に貢献できるか。世界観光客到着数は、経済環境の変化やテロでも上昇している。「北東アジア」は、この 10 年、世界平均が 3.8%だが 5.7%と伸びる。次に“出遅れ”の日本はどうか。元小泉首相は 2003 年に「観光立国の道」を表明し「2010 年に 1,000 万人」の訪日外客策を発表。訪日キャンペーンを始め、前半は順調だが後半は経済不況などで目標に達せず。2011 年に東日本大震災を経て、2013 年に 1,000 万人の大台に、以後、急増し昨年は 2,800 万人と記録的だ。官民協力の賜物である。しかし、中国人客の依存体質は課題だ。他方、日本人海外旅行者は、若者の旅行離れ等で、長年、約 1,700 万人。日中や日韓の外交的緊張もブレーキ役。「飛躍のインバウンド」「足踏みのアウトバウンド」だ。政府は 2020 年に 4,000 万人、2030 年に 6,000 万人の外客目標にし勢いよく進む。

「北東アジア観光圏」の特性は？　その活性化はどうか。まず「変動が激しくいびつな国際交流」や「隣国でありながら極めて少ない国際交流」。前者の例は「訪中日本人：訪日中国人＝259 万人：637 万人」。後者は日ロ間「訪ロ日本人：訪日ロシア人＝84,600 人：54,800 人」。次に「渡航の厳しさやシーズン波動が大きい」。ビザ緩和策やオフ対策の仕掛けが必要である。3 番目に「現地受入が弱く観光プロが少ない」。受地の開発、ガイドや通訳の養成が重要。4 番目に「観光情報が少なくプロモーションが弱い」。一国だけでは弱く広域ネットワークを構築し PR すべき。日本海を軸とした共同クルーズ戦略もある。ところで、日本の活性化を進め当観光圏に何を貢献できるか。インバウンドに偏しない「TWOWAY(ツーウェイ) TOURISM(ツーリズム)」を提案する。特に、若者の旅行離れ対策だが「海外教育旅行」や若き女性の「個人旅行」を推進すべき。「訪日客誘致策」は現在の低い「日本人出国率 12.8%」では、近い将来、伸び悩む。30～40%になれば、訪日客 4,000 万人と均衡ある正真正銘の観光立国となり当観光圏に寄与できる。また、激増の中国人客を“武器”とする「一帯一路」構想に“協力”もしくは“対抗”でき、「北東アジア観光圏」の安定化に貢献できる。最後に、観光プロモーションや受入態勢を共同で行えば、圏内の「国際理解」や「国際協力」の精神が醸成される。（了）

（注：本論の「北東アジア観光圏」は、日本、中国、韓国、北朝鮮、モンゴル、ロシア。従い、国連世界観光機関による統計地域と異なる。）

©ERINA